

## 内外交差点

# 古代インカ帝国のロマンを求めて タクシー世界一周記<アジア~北米編①>

成川 史華氏 (扇交通社長) 第1/12回

「マチュピチュに行ってきた」。それはカナダでの友人の言葉がきっかけだった。

世界中に行ってみたいところが沢山ある。以前から見てみたいと思っていたウユニやパタゴニアも丁度南米にある。「そうだ、マチュピチュに行こう!」。2015年の秋。私はカバン1つで旅に出ることにした。今思うと将来的に祖父の代から続くタクシー会社に入社することがボンヤリと頭にあったような、なかったような…?とにかく自分の「この景色が見たい」という欲望のまま、第1歩を踏み出したのだ。

そのころは、ウーバーが福岡で行っていたライドシェアの実験の中止を国交省が指導したことを皮切りに、さまざまなスタートアップが旅客運送事業にアプローチをかけ、「0円タクシー」というサービスもあったかと思う。当時の私の認識としては、「父がやたらウーバーに怒っているな」といった程度のもので、その段階でカナダに渡っていた。カナダのタクシー乗務員はどう思っているのだろうか?興味本位で、カナダのタクシー乗務員にウーバーの感想を聞いてみた。皆一様に——とまでは言わないが、多くの乗務員が「あいつら無茶苦茶なんだ」「俺たちの仕事が本当になくなっている」と怒り出し、「性被害に遭う女の子もいる。かわいそうで仕方ない」と涙する人もいた。ものは試しだとウーバーのアプリをDLして3回ほど使ってみた。トロントの街からナイアガラまで使ったが、「全然、普通だった」というのが率直な感想だ。もう10年ほど前の話である。

当時のカナダのタクシーは電話で呼ばなければならなかったが、電話でタクシーを呼べるほど語学が達者ではなかった私は、アプリで配車依頼を行えるというのが一番、有り難かった。加えて自分が呼んだクルマが今どこにいるのか見られるというのは安心感があったし、乗った時に自分のいる場所が確認できるということも良かった。当時は、配車アプリが未発達だったということもあり、タクシーの位置情報を利用者がリアルタイムに把握することがあまりできず、その辺りが大きな差になったのではないだろうか。言葉が通じない場所で、そのようなサービスはとても嬉しかった。恐らく今現在、日本を

訪れている多くの欧米系のインバウンド観光者たちも自国で使っていたアプリをシームレスで日本でも使えるということに魅力を感じているのではないかと思う。

一方で当時の他国のタクシーはどうだったのか?学生時代にニューヨークへ友人を訪ねて行ったときのこと。街中で手を挙げて拾ったタクシーに次の目的地を告げると有名な観光地だったのに、「知らないから降りろ」と言われた。日本ではタクシーが目的地にたどり着かないことはないのに、衝撃を受けた。他にも目的地と全然違うところに連れていかれたり、チップを積まなければ降りしてくれないという経験もした。もちろん、多くの場合は普通に乗ることができたが、あまりにも嫌な経験をした時のインパクトが強すぎる。

他にも、韓国に友人を訪ねて行ったときには「性被害の可能性がある。最悪、殺されてしまう可能性もあるから、女性一人では絶対にタクシーに乗らないで。夜は(韓国語の分からない)男性と一緒に乗らないで」と言って必ず友人がアテンドしてくれたので、タクシーに乗ろうという気にもならなかった。フィリピンでは、事前に「タクシーに乗る前にナンバーを写真に撮っておいた方が良い」というアドバイスを受けていたので、毎回タクシーに乗る前にナンバーとクルマと乗務員の顔が分かるような写真を撮っていた。普通はそんなに写真を撮られるのは嫌がられるのではないかと思うが、彼らは嫌がらなかった。そのおかげなのかかわからないが、特にトラブルなく安心して利用できた。タクシーで長距離移動した際には、オーバーヒートして乗務員が理由が分からないと焦っていたこともある。日本では出庫前点検があるのでそのようなことはあり得ないが、海外では当たり前になることで、これにも衝撃を受けた。

日本のタクシー業界が「海外のタクシーがしっかりしていないからライドシェアが流行ったんだ」と主張しているのは、当時は事実だった。あれから約10年が経ち、タクシーは大きな進歩を遂げており、状況は異なっていると思う。当時、ライドシェアの影響で海外のタクシー会社が複数倒産したというニュースを聞いても、驚いた半面、理解できる側面があったのも正直なところだ。

風はアメリカを抜け、一路、南米へ。次の国のタクシーはどうだろうか。さあ、旅を続けよう。

